

多くの繊細な子供たちのために

「子どもの話を聴くときは」
子どもの不安を聴くときは、子どもの気持ちを感じてね
「なぜ?」「どうして?」が、問いつめに感じてしまうとき、あるの
子どもの心配、不安はね、「不安なの?」って繰り返してね
答えは、一緒に考えて

出典:「子どもの話を聴くときは」 一部抜粋 (兵庫県教育委員会 防災マニュアルに基づいて) 文:篠原久美子

子供がピーマンを嫌うのは、苦くて酸っぱいからと言います。子供の繊細な舌の感覚は、苦味と酸味を毒と捉えてしまうらしいのです。ですから、嫌うのは、わがままだからでも、未熟だからでもありません。大人になるにつれて好むようになるのは、食べても毒とならなかった経験を積み重ねたり、舌の感覚が鈍化したりしただけのことなのです。

さて、私が幼い頃に、壮大な自然の中で暮らす動物たちの生態を探る内容のテレビ番組が放映されていました。我が家では、週末の夕食時に流れるこの番組を食卓を囲みながら観るのが常でした。けれども、私はこの番組が大層嫌いでした。なぜならサバンナで逃げ惑うシマウマの群れの中で、疲れて逃げ遅れた一頭がライオンに捕えられ、食べられてしまうシーンなどが映し出されるからです。それまで美味しく食べていたお肉が、なんだかシマウマのそれに思え、シマウマの悲しさまでも伝わってくるようで、苦しくなる気持ちを抑えてボソボソと食べていると、「どうしてそんなふう食べるんだ」との家族の声。「どうして」と問われて、その答えを探してみても、よい言葉が見つからず、下を向いて黙るだけの私。そう感じてしまう自分のことをおかしいのかな、わがままなのかな、強くないからなのかなと、当時の私は始終思っていたように記憶しています。

けれども、今なら分かります。ピーマンの苦味や酸味を感じる繊細な舌の感覚をもつ子供の頃は、心も同じくとても繊細なのです。おかしくもなく、わがままでもなく、強くないからでもなく、ただただ繊細なだけです。そして、繊細なことは、決して悪いことではありません。

ごく最近、しばらくぶりにこのことを思い出したのは、冒頭の詩を目にしたからです。大人は子供だった頃の自分をいとも簡単に遠くに追いやってしまうようです。

普段、学校の中で何かが起こって、当事者である子供たちと関わるときに、いつも心掛けたいと思っています。それは「どうして」と安易に尋ねないことです。その理由が、この詩の中にあります。

大人の悪気のない、何気ない「問い」を「問い詰め」に感じてしまうと、子供は伝える言葉を失います。罪悪感があればなおさらです。代わりに、「どうした」と優しく尋ねてみます。すると、子供の口からそのうちに、起こったこと、気持ち、その訳、そして反省の言葉までも出てくる 경우가多くあります。

どうしての「て」、どうしたの「た」。このような時、「て」と「た」、たったの一文字を変えただけで、本当に不思議。魔法をかけられたように、子供たちの様子が大きく違ってきます。

本校では、今年度も子供たちの表現力の向上を目指して研究を進めていく予定です。「よい『話し手』を育てるためには、まずよい『聞き手』を育てること」と言われます。子供が自分の思いを躊躇なく、積極的に、かつ適切に表すようになるためには、まずは子供を取り巻く私たち大人が、よい聞き手、受け取り手になろうと絶えず努めていく必要があるのではないかと考えています。

「どうした」と問われていたら、「食べられてしまうシマウマがかわいそう」と伝えられていたかもしれない、あの頃の私のような多くの繊細な子供たちのために。

今後も、ご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。